

[第2章]

地域通貨を はじめませんか

この章では、具体的に始めるための基本ステップと、運用に役立つさまざまなヒントを述べています。



第2章 地域通貨をはじめませんか

1 具体的に始める前に～基本ステップ～

地域通貨を取り入れる前に、なぜ取り入れたいのか、じっくりと考えてみましょう。第3章の事例「地域通貨の元気なリーダーたち」でも触れていますが、それぞれに動機や目的はさまざまです。ということは、地域通貨にはこうしなければいけないというルールはありません。それぞれの目的に合わせて、地域にふさわしい方法を考え、その目的が達成されるための一つの手段（ツール）として実践していけばいいのです。

「でも、どこから、どうして始めればいいのか」と戸惑っている皆さんに、まずは、基本ステップをご紹介します。それに引き続いて、実践中にぶつかる問題点について質問コーナーで具体的なヒントを紹介しています。

(1) 中核になるメンバーづくり

地域通貨を始める第一歩は、活動の核になる仲間づくりです。今の生活や地域を、もっと楽しく安心して過ごせる「場」にしたい。商店街を何とかして、地域経済の活性化を実現したいなどという仲間が集まりましょう。そして、地域通貨の理念や目的を話し合い、それに賛同する人、やってみようという人たちで、まず中核になるメンバーをつくります。その数は、最低3人以上、できれば5、6人いれば十分です。

(2) なぜ始めたいのか、理念をしっかりと

中核になるメンバーで、課題を解決するためには地域通貨が最も適切なツールであるかどうか話し合しましょう。次に、資料（56ページ）の「参考になるホームページ」の事例などを参考に、どのタイプの地域通貨を取り入れたいのか、自分たちの目指している目的に合っているかどうか徹底的に話し合ってみてください。ちなみにタイムダラーの理念は、「この世の中に役に立たない人はいない」で、市場経済では価値を認められていない地域や家庭での「しごと」に価値付けをし、非市場経済を豊かにしようというものです。

(3) 仲間や地域のニーズの確認

社会の中で、自分たちが住む地域の中で、また向こう三軒両隣の間で、援助を必要としている人たちがきっといるはず。それらの人たちのニーズは、私たち家族や仲間、友達、近所の人々が手をつないで助け合えば解決できるのではないのでしょうか。「社会が必要としている援助の手」を差し伸べたいと思う人は多いはず。この思いを、一人ひとりの責任として行動に変えることが第一のステップです。まず「誰が、どんなことを必要としているか」をリサーチすることから「それでは、こんなことをやろう」という目的が見えてきます。

(4) ゲームで体験しませんか

地域の中でお互いに助け合うシステムを体験できるゲームです。タイムダラー・ゲーム⁽¹⁾と呼ばれ、このゲームで、地域通貨に必要な「双方向でのサービスのやり取り」、「助けられ上手」がどんなことかを体験できます。さらに、サービスの提供者と利用者を結び付けるコーディネーター（世話役、仲介役）の大切さも学べます。コーディネーターの働きで、サービスを通して知らない人同士が結び付けられ、またメニューが広がります。

(1) 詳しいゲームの進め方や、ゲームに必要なカードなどは、NPO法人タイムダラー・ネットワーク・ジャパンのホームページをご参照ください。無料でダウンロードできます。http://www.timedollar.or.jp

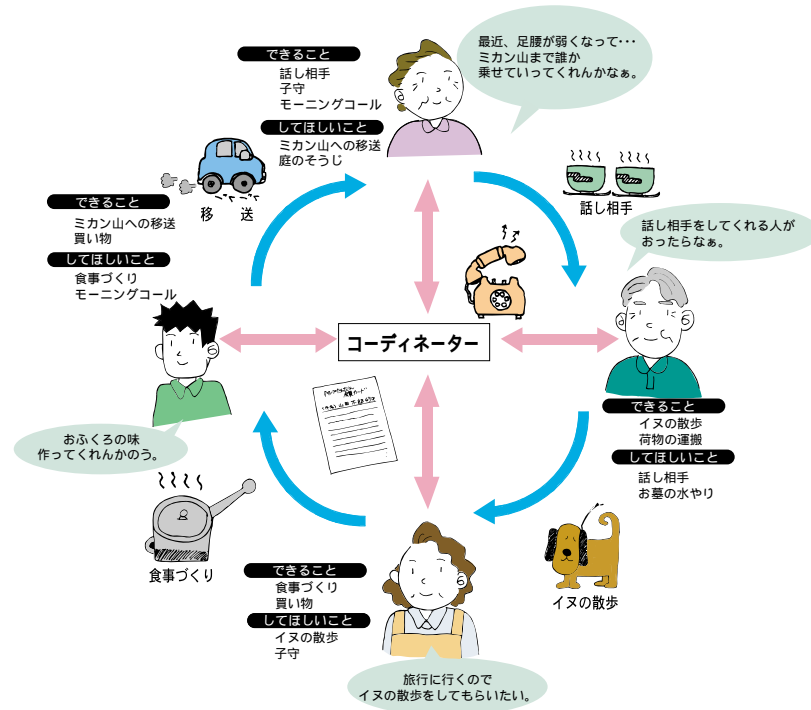
(5) サービスのメニューづくり

ゲームでさまざまなメニューを体験した後、自分たちの地域ではどんな内容の助け合い、支え合いをすればいいのかを具体的に話し合い、「メニューづくり」をしましょう。これをする中で、地域通貨の目的や内容が見えてきます。双方向の助け合いの意味もはっきりしてきます。最初は、自分達の日常生活の中で、困っていること、不便に感じていること、助けてもらいたいことを率直に話し合しましょう。模造紙などにそれらを書き出し、リストをつくります。まず、身近なメニューから始め、少しずつ必要に応じ、話し合いの中で増やしていけばいいのです。

メニューの一例をあげると、車での送迎、荷物の運搬、買い物、子守り、お使い、ネコの世話、草取り、家事手伝い、手紙の代筆、ビデオのダビングなど多彩です。また、自分の得意な技術を提供する日曜大工、庭木の手入れ、裁縫、パソコン指導などもあります。周囲の人たちの埋もれている能力を発掘し、お互いに利用し合うことが大事です。メニューは、一部の人が決めて、会員に押し付けるものではなく、長続きしません。会員同士で行うサービスの基本は、「自分が出来ることをできる時にする」と「困ったときには遠慮なくしてもらおう」です。ですから、サービスの内容は、高齢者向けだけでなく、身近な生活の中で必要とされるさまざまなことが含まれます。

(6) コーディネーターを決めましょう

コーディネーターの役割は、図-1のように会員の「できること」「してほしいこと」をつなぐ役(世話役)であり、活動のカナメです。コーディネーターについての詳しい内容は20ページをご参照ください。



(7) 名称と表現方法

この試行期間中に、活動の単位となる地域にふさわしく親しみの持てる名前を考えましょう。愛媛県の関前村の「だんだん」、松山市の「いまづ」や「となり」、新居浜市の「わくわく」、波方町の「ゆうゆうヘルプ・波方」や玉川町の「バンブー」など地域にふさわしい楽しい名称があります。

また、交換する時間数(点数)を示すのに、どんな形の「通貨」を採用するかも大事です。紙券(わくわく、ゆうゆうヘルプ・波方)、チップ(だんだん)、小石(いまづ)、竹の輪切り(バンブー)などのほか、米国や英国のタイムダラーのように「タイムキーパー」というパソコンのソフト⁽²⁾で時間を管理する事もできます。どんな形にするかを話し合うことも、地域通貨を理解する上で大切な時間です。

(2) NPO法人タイムダラー・ネットワーク・ジャパンのホームページをご参照ください。
<http://www.timedollar.or.jp>

(8) まず、始めてみよう

さて、基礎的な準備はできました。でも、中核メンバーだけではサービスの交換は十分にできません。そこで、身の回りの友人やいろいろの会、グループで知り合った知人に参加を呼びかけましょう。できるだけ地域通貨の基本的な考えを理解してもらうようにします。

参加呼びかけの集会を開くのも効果的です。愛媛県での導入の場合は、県が主催している出前講座(6ページ参照)に申し込みをし、地域通貨の講師を派遣してもらうこともできます。

ところで、会員は多いほど良いというわけではありません。理念やシステムを理解して、積極的に活動に参加する意志のある人でないと、活発に機能しません。一度に会員を増やそうと、既存の会に呼び掛けて会全体で参加させる方法では、名前だけの会員が多くなります。あくまでも「この指とまれ方式」で、草の根的に同じ志を持った「同志」を徐々に増やすのが最善です。年代や性別にこだわらず、多様な人たちやグループに呼びかけましょう。地域を優しさの絆(きずな)で結びあい、安心して暮らせるコミュニティを作り上げようという人々を集めましょう。とにかく、やってみなければ何も分かりません。双方向の助け合いには、慣れることが必要です。今までの「助けるだけ」のボランティアに慣れた人たちには、「助けられ上手」になるのには時間が掛かります。しかし、これが第一歩なのです。高齢者も、「サービスの提供者」として参加を呼びかけましょう。「年寄りだから何もできない」と言う高齢者に「出来ること」を一緒に考え、「あなたたちの経験や知恵が欲しい」と声をかけましょう。

(9) 運営の仕方

ア. 点数の記録

記録をするのはコーディネーターにとってかなりの負担になりますが、この記録は、自分達の活動を目で見える形にするだけでなく、行政や企業の支援を得るためにも大切です。この方法には、記録カードを作ったり、コンピュータに記録するなど、色々な方法があります。「ゆうゆうヘルプ・波方」(28ページ参照)では30分券の裏側に10人の利用者の名前を入れるスペースがあり、簡単に時間の記録ができます。

ただ、点数は自分のために貯める貯金とは違います。助け合いを行った「証」(あかし)なのです。アメリカのマイアミで実施しているタイムダラーでは、中高生は点数を受け取らず、事務局に寄付する事を奨励しています。寄付をされた点数を事務局では、必要としている人たちのサービスに使っています。こうすれば、点数は2度役に立つわけです。このように、工夫一つで楽しい活動が、より有効に地域の役に立っています。大切なことは、グループがスタートした後は、なるべく頻りに会員同士が集まって食事会やお茶会をし、話し合うことが必要です。顔の見える信頼関係を築くために、できるだけ多くの集いを持ちましょう。地域通貨の精神を理解し、親睦を図ることが大切なのです。

イ. 運営の経費

会を運営するためには、最低限の経費が必要になります。電話代、通信費、会議費やサービスを提供する側の交通費、ガソリン代などです。寄付金や助成金などによって資金を得ることができれば問題はないのですが、普通は資金なしで始めることになります。

会の活動が社会に認められ、また法人格を持って活動を始めるようになれば、色々な資金集めも可能になります。小グループでの活動では、まずは、会費で運営を始めましょう。組織が大きくなれば、積極的な資金集めが必要になってきます。また、そうしないと、サービスの拡大は図れません。

2 .こんな時、どうしたらいいの？

～立ち上げとその後の運用に役に立つヒント～

小さなグループから始める場合、世話役が自宅でコーディネーターをつとめ、自宅の電話を使って役目を果たすことから始められます。人数が多くなれば、地区ごとにグループ分けをしてそれぞれにリーダーをおいて活動を進める方法もあります。会員には、地域通貨の考え方をよく理解してもらうことが必要です。そのためには、小さなグループで定期的に話し合いができることが大切です。名簿上だけの会員が多くならないためです。

運営を担当する拠点は自宅を利用していても、事務局になりますから、連絡やコーディネーターのために電話代、郵便代などの経費が必要です。会報をつくったり、会員研修の資料づくりなどの費用も必要です。最初は、最低限の必要経費は個人の負担でやって行けますが、会の運営を特定の個人負担だけで済ましては、長続きしません。継続的に活動を行い、誰がやっても続けられる会にするには、経済的に自立する仕組みが必要です。費用づくりのためには、会費、企業や個人の賛助会費、寄付、助成金や、自主事業などがあります。話し合いの中で、必要な経費を検討し、まず会費で自主的な活動を支え、活動が拡大するのに沿って財政的にも拡大させましょう。

ウ．自立した組織にしよう

行政や企業の支援も必要ですが、自立した組織でなくてはなりません。安易に助成金や補助金を当てにすると、行政や企業の下請け団体になる危険性もあります。

また、補助金や助成金がなくなったので活動が停止するというのでは、理念を実現することはできません。行政や企業とは、それぞれの役割を認めながら、理念の違いをはっきりさせ、お互いに対等なパートナーシップを組みましょう。そして、活動を始めて半年後、1年後といった時期に、それまでの活動の自己評価をしてみましょう。うまくいった点、反省点をはっきりさせ、それ以後の活動を勇気を持って修正していきましょう。

(10) 活動を評価しよう

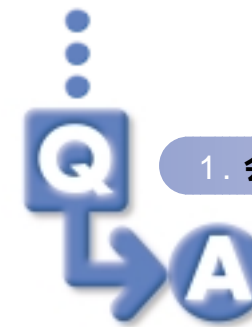
サービスのメニューの見直し、貯まった点数の使い方、活発な交換を促すための方法など、定期的に集まって、自分達の活動を評価しましょう。

活動の評価をする際、会員間でのサービスの交換時間を基準にすることもできますが、それよりも、時間はかかりますが、会員間で聞き取り調査をしてみましょう。活動の時間数や、個人の時間数の大小によって評価をすることもできますが、数値で表すよりも、「地域通貨を始めて嬉しかった経験」「自分が変わった点、地域が変わった点」など話し合うことがもっと大切です。

イギリスのタイムバンクでは、会員間の聞き取り調査で1年後の感想として、次の事柄を挙げています。

お隣同士の助け合いが復活した 地域が安心して住める場所になった 健康増進につながった 異世代間での相互扶助が生まれた 高齢者が活動的になった 身体・知的障害者との連携が生まれた 介護者の休息につながった 世代間の理解が深まった 地域の大学や企業の理解や参加が始まった 環境浄化につながった 麻薬中毒者のリハビリになった

会員間の信頼を高めるためにも、定期的に懇親会を持ち、さまざまな意見を交し合うことが大切です。きっと、新しい展開、次の可能性につなげる事ができます。

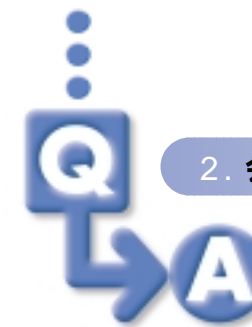


1. 会員はどうやって集めたらよいのでしょうか

会員の集め方にはさまざまな方法があります。

まず、近隣の人たちへの「口コミ」や、地域の公民館や集会所などでの説明会を通じて、地域通貨のシステムや考え（理念）について理解してもらえるチャンス積極的に作ります。その際に、「タイムダラー・ゲーム」⁽³⁾を活用するのもよい方法です。次に効果的な方法は、会員のための懇親会やイベントを定期的に企画し、地域通貨に興味のありそうな人たちにも参加してもらうことです。また、ボランティア・グループや福祉関係の会合、各種団体の会合などで、「助け合い、支え合いのコミュニティづくり」といったテーマで話すのも効果的です。

(3) NPO法人タイムダラー・ネットワーク・ジャパンが創作したゲーム。50種類のサービスのカードと、ゲームの進め方は、同法人のホームページからダウンロードできます。 <http://www.timedollar.or.jp>



2. 会員数は何人くらいが適当なのでしょうか

これまでによく見られる組織づくりでは、まず団体（組織）の形づくりから始まりますが、地域通貨では、「同じ考えを持つ同志」のグループづくりがスタートです。顔の見える仲間から始めましょう。最初は地域通貨の理念を十分理解し、意欲的に活動できる5人から10人くらいの少人数で始めるのが良いのですが、ただ、小グループだけでは、サービスの交換ができない事もありますので、同じ地域の他の地域通貨のグループと、ネットワークを組み、お互い助け合う事が大切です。スモール（小）+スモール（小）=ラージ（大）が理想的です。

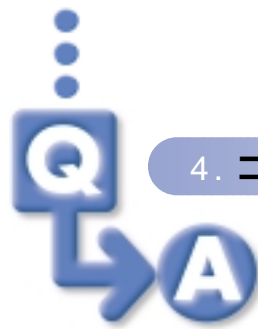


3. 地域通貨を進めるには、コーディネーターが必要ですか

はい、必要です。コーディネーターというと、難しく聞こえますが、言わば「世話役」「会員同士のサービスの仲介役」が必要になります。お互いに知らない会員同士が、気兼ねなくサービスを交換できるように、そして「助けて欲しい人」と「助けができる人」とを組み合わせる大事な役目を果たしますし、新しい人間関係を広げる役割もします。

ただ、事務所があって、そこにいつもコーディネーターがいて、電話に出られるなどという恵まれたケースは、始まったばかりのグループでは無理でしょう。そこで、コーディネーター役の会員は、自宅に留守電を設置したり携帯電話を持ち歩いたり、さまざまな工夫をしています。

そんなグループのひとつ、松山市の「となりぐみ」は、メンバーの多くが学生やサラリーマンで構成されており、コーディネーター自身も時間をとりづらいため、1ヵ月に1回「予約会」を開いています。この会では翌月に「してほしいこと」「できること」をみんなでお話し合い、その場で各自の予約表に記入をします。この予約会は、単にサービスの予約だけでなく、お互いに顔を合わせて情報を交換したり、心の触れ合いを増す懇親会も兼ねています。一石何鳥もの効果を上げているこの会は毎回、会に興味のある新しい人たちが参加し、会員募集にも役立っています。



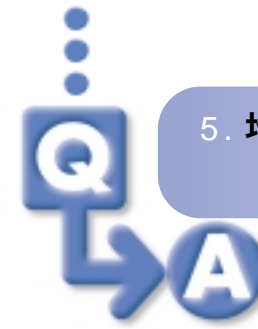
4. コーディネーターの役割を教えてください

コーディネーターの主な役割は、会員同士の助け合いが、活発にスムーズに行われるよう手助けをする、つまり連絡調整をすることです。そのため、日頃から会員のニーズをしっかりと把握しておかなくてはなりません。

コーディネーターに求められる基本的な資質は、次のようなものです。

- 会員個々の価値観、ライフスタイルや性格などの違いを認め、一人ひとり違う人間だと理解できること
- 会員のニーズをそのまま受け止め、批判しないこと。聞く能力をもつこと
- 会員の隠された能力や才能を引き出すことができること
- 会員のプライバシーを守ること
- かたくなに自分を他人に押し付けない柔軟性があること

なお、会員それぞれが、コーディネーター役を交代して学び合う方法を試みましょう。コーディネーター＝リーダー・ボスといった考え方ではなく、会員同士が横につながって対等でのびのびと参加し活動できることが、地域通貨の素晴らしさです。



5. 地域通貨の良さを地域の人たちに理解してもらうには、どうすればよいのでしょうか

地域通貨は新しい概念ですから、地域の人たちに理解してもらうためには、忍耐強く学習会などを重ねながら、説明し納得してもらうことが必要です。講演会や説明会、印刷物（広報紙、パンフなど）の配布、マスコミによる報道の利用など、広報の手段には色々あります。忘れてはいけないのは、ITを利用した広報です。ホームページや電子メールをフルに活用しましょう。そして、活動団体同士のネットワーク利用も大切です。それでは、具体的な方法をあげてみましょう。

クチコミ（口コミ）

何と言っても一番の宣伝は口コミです。地域通貨でサービスを受けて助かった話、喜んでもらった話など、本人が実感を込めて話すことほど、効果的なことはありません。

ホームページ

ホームページの特徴は、印刷の必要がないため、より早く多くの人にニュースを伝えることができます。個々のグループが、それぞれにホームページを開設するのは無理かもしれませんが、最近では簡単に作成できるソフトが多くでていますので、挑戦してみてください。

会報の発行

自分達の活動をできるだけ具体的に紹介しましょう。参加者の声など、身近な話題を盛り込むことによって、より具体的に内容を理解してもらうことができます。誌面から、楽しい活動が見えてくるようにしましょう。

チラシ

イベントや学習会、シンポジウムなどのターゲットに合わせて、効果的に配布することが大切です。手づくりで構いませんので、自分たちの活動を楽しく、判りやすく伝えましょう。

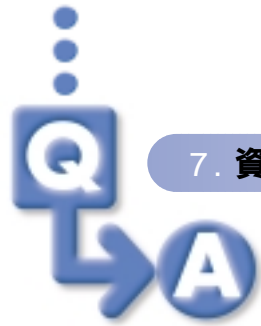


6. 地域通貨を始めるには、どれくらいの資金が必要ですか

地域通貨は、小さいグループでは、会員個人の家から始められます。導入するにあたって必要な経費は下記に挙げるものですが、工夫しただけで数万円程度からでも始められます。

最初に必要なものは、

- 電話代
- 会員の申し込み用紙のための紙代、コピー代など
- 交換する点数を表す紙券、チップ、通帳などの作成費
- 活動内容の分かるチラシ作成費
- その他の事務用品 など



7. 資金集めはどのようにしたらよいのでしょうか

資金集めの方法はさまざまですが、次のような方法があります。

会費

年会費は1000円位が多いようですが、特定の個人に負担がかからないように、活動を進めていく中で、相談して決めていけばいいでしょう。

助成金、補助金

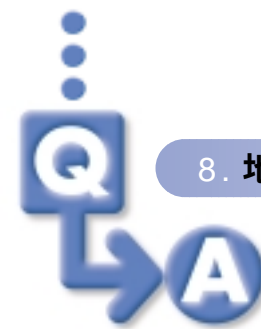
目的に合わせたさまざまな助成先がありますので、各種財団のホームページやNPO・ボランティア情報などで情報集めをしましょう。申請書の作成の際、団体やグループの活動を記入しなければなりません。具体的に記入するには、説得力のある説明が必要になります。そんな際、サービス交換の記録・数字などが意味を持つてくることもあります。

自主事業

バザー、セミナー、講演会など、目的に合わせてさまざまな事業が考えられます。

委託事業

行政や企業の事業を受託して費用を受け取るものです。ただ、資金集めだけのために、本来の自分達の活動の目的とかけ離れた事業を受けないように、気をつけておきたいものです。それには、事業内容について十分に話し合うことが必要で、安易に下請けをしないようにしましょう。



8. 地域通貨は、地域やグループから離れて転宅した場合でも使えますか

地域通貨は、会員の間で行う相互扶助です。基本的には、会員がグループから離れると、地域通貨の点数は使えないのですが、転宅した地域に地域通貨を行っているグループがあれば、グループ間の話し合いで点数を活かすことも可能です。愛媛県では、さまざまなグループがフリーマーケットやコンサートを開催する際、それぞれの地域通貨で品物が交換できたり、切符の一部を払えるなどの実験をしているグループもあります。サービスの交換だけでなく、イベントなどで楽しく使う方法も考えて見ましょう。なお、点数は高齢者や事務局に寄付ができ、こうすることで、2度活用できます。



9. 地域通貨を使う活動範囲は、どれくらいがいいのでしょうか

エリアはあまり広くないほうが有効です。たとえば、「ついでのお使い」のように日常生活の中でのちょっとしたサービスの交換を進めていますので、会員同士が広範に点在しているのでは、ほんのちょっとした頼み事があっても気軽に頼むことができません。ただ、松山市の「となりぐみ」のように、会員の居住地が広範囲でも、「予約会」といった独自の工夫をこらしてサービスの交換を実現しているケースもあります。



10. 地域通貨の点数を貯め込まない工夫はあるのでしょうか

各地でのさまざまな工夫をご紹介します。

愛媛県「ゆうゆうヘルプ・波方」の場合

入会の際に10枚の紙券が渡され、30分のサービスに1枚の紙券を交換します。そして1年後には、どんなに貯めていても、また最初の10枚から始まるという方法をとっています。その理由は、時間を貯めるのが目的ではなく、サービスが循環することを目的としているからです。

イタリアの時間銀行の場合

マイナスの利子がつき、プラスのポイントは4、5ヶ月くらいで権利が消滅するシステムとなっています。

アメリカのタイムダラーの場合

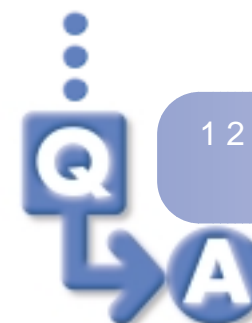
自分が使える以上に点数がたまったときは、事務局や地域の高齢者に寄付をすることを勧めています。また、学生たちには寄付をすることを勧めているグループもあります。また、シカゴでの「子どもたち同士の指導者プログラム」では、1学期ごとに点数が100点貯まると、ご褒美として中古のコンピュータを贈っているプログラムもあります。

愛媛県新居浜市の「わくわく」の場合

サービスの交換に使わない点数は年の終わりに、「島の美化を推進する基金」に寄付をする方を勧めています。2004年の春には会員の点数で、40本の桜の苗木を購入し、会員たちが協働で植栽しました。

覚書・念書

地域通貨では、お互いが支え合うことが基本ですから、法的な書類などは必要ないと思われませんが、事故対策について会員間で事前に話し合い、会員間でのルールを決めることは重要です。「ボランティア活動保険」に加入することに加えて、会員間で、覚書や念書を交わしておきましょう。これは、法的なものではなく、お互いの信頼に基づいた助け合いの中での確認を書類にしたものです（49ページ参照）。



12. サービスのやり取りが活発でないのですが、何かいい方法がありますか

サービスのやり取りが少ないからといって、必ずしも成果が上がっていないとはいえません。というのは、日常生活の中で、困ったときに困った人がお願いをするといったサービス内容を取り入れているグループでは、そう度々やり取りがあるわけではないからです。そのような時には、数値で表すよりも、地域通貨を取り入れたことで、自分が変わった点、地域が変わった点などについて話し合うことが必要です。また、地域通貨を経験してよかったことや嬉しかったこと、感激したこと等、会報などにまとめてみましょう。米国のタイムダラー・ कांग्रेसでは、「タイムダラー物語」というセッションがあり、各地からの実践者の感動した体験を分かち合う時間があります。

関前村の「だんだん」代表の美藤美智子さんは、「今日も『だんだん』、明日も『だんだん』で走り回っているのは、長続きしません。導入後、数字では表せないけれども、信頼のネットワークが島の中に育ってきているのを感じます」と語っています。ゆっくりと、自分たちにふさわしい地域通貨を楽しみながら育てていきましょう。

第2章は、『タイムダラー』の一部を追加、修正しています。

11. サービスのやり取りの中で、事故にあった時のための保険にはどのようなものがありますか

まず保険ですが、サービスの中に、送迎、子守りなどを取り入れている場合は会員に保険に入る事を勧めてください。会員を事故から守る保険と、会員間での決め事についてお知らせします。詳しい内容は、53ページをご参照下さい。

ボランティア活動保険⁽⁴⁾

特長

- ア. ボランティア活動中のさまざまな事故によるケガや賠償責任の補償
- イ. ボランティア自身の食中毒（0 - 157）や特定感染症の補償
- ウ. 天災（地震など）によるケガの補償

補償の範囲

この保険は、ボランティア自身がケガをした場合の「障害事故」と、第三者の身体や財物に損害を与え、法律上の損害賠償責任を負った場合の賠償事故がセットになっています。

補償内容と掛け金保険金の内容により、基本タイプA、B、Cと天災タイプがあります。

補償期間 毎年4月1日～翌年3月31日まで

(4) ボランティア活動保険についての詳細は、最寄りの市町村社会福祉協議会までお問い合わせください。